

令和 2 年度（第 68 期） 事業計画

令和 2 年 3 月 19 日

公益財団法人 京都健康管理研究会

公益財団法人京都健康管理研究会（以下、本財団とする）は、令和 2 年度も、本財団定款に掲げる「公益性を重んじ、難病を始め、結核性疾患・生活習慣病・職業病・その他の疾病の予防、早期発見に関する調査研究並びに治療を含む医療に関し必要な事業を行い、以って広く国民の健康保持、増進に寄与・貢献することを目的する」を達成するために各事業を積極的かつ誠実に展開していく。公益性を最重要とする事業目的に鑑み、難病、特に呼吸器系の難病を対象に、診療部はその管理・治療に、また、健康管理部も難病の早期発見を意識しての健康診断を進め、本財団一丸となって難病への対応に努め、さらに、地域住民に加え、広く市民の病気の予防・健康増進、健康管理、社会福祉に貢献し、「健康の輪」を広げるべく、診療部・健康管理部の連携の下に、臨床研究センターを含め事業を展開する。

近年、医学研究分野や最新医療分野の高度分業化、医師を含む研究・医療従事者の高齢化等により医療機関は慢性的な人材難が続いている。この様な中、本財団が目的とする呼吸器系を始め、難治性疾患を対象とする専門の研究分野を志す医師等の人材を確保することが極めて困難になっている。本財団の公益事業を継続していくためにも、本財団の目的に適う専門性の高い人材の確保は急務である。そのため呼吸器系はもとより、各領域での難治性疾患という専門分野を志す研究者や医師等、若手人材の育成が必須であり、その一助となるよう助成活動を進めて行く事が本財団の務めであろうと考える。このため人材育成費の一部、研究機関や臨床研究に携わる医療機関、学会等へ研究費や運営費の一部、また、専門知識習得あるいは意見交換等、専門医や若手研究者の育成のための対象疾病情報の収集・情報交換、情報発信の場を広げられるようにすることへ助成を計画、実施して行く。

加えて、厚生労働省が難治性疾患として、様々な分野の 333 に及ぶ疾患を指定している。しかし、これ以外に現在の医療では原因不明で対処できない疾病が存在する。微力ではあるが本財団の設立理念に則り、研究を継続するための一助となるよう、研究費の一部を助成を計画している。また、研究成果のみならず、幅広い医学的知識を論文・講演・出版等

により広く一般に知らしめ、「病気」や「健康」に対する理解を深めていく事業にも助成し、活性化の輪を広げていく。

今期は、この計画した助成活動を定款に明文化し、公益に資する事業としたい。従って、京都府から公益事業変更の認定の承認を得る手続きを進めている。これに従い、本財団定款や諸規程も併せて改定し、円滑な運用を図る。

また、世界的に景気の閉そく感がある中、新型コロナ肺炎の世界的な流行により、世界の経済活動にブレーキがかかり、極めて不安定な世界情勢となっている。本財団のような中小規模の医療機関は、経済的、社会的な情勢変化が診療および健康診断業務に対し、直接あるいは間接に大いに影響される。これらの情勢変化を総合的、かつ慎重に判断しながら令和2年度も対応していくことが必要不可欠である。特に新型コロナ肺炎の流行動向は直接本財団の診療や経営に重大な影響を与えるものと思われ、時々において重大な判断をしなければならない事態も想定され、極めて注意深く注視していかなければならない。

以上の状況を踏まえ、公益財団法人の定款第4条に定める事業を遂行するために、令和2年度の事業計画も以下の基本方針に沿って策定する。

1. 難病、特に呼吸器系の難病（特定疾患）の診断・治療法などの臨床での実践を主に、調査・研究していく。特に、長期臨床経過の蓄積から見た難病疾患の全体としての把握を、治療・管理に活かせるような意義のある情報発信をして行く。
2. これまで長期経過を診て来た難病患者の高齢化に加え、高齢者の健康管理に対する強い要望があることを基盤として、慢性疾患、高齢者への医療の有り様を診療現場から発信し、啓蒙していく。
3. 健康診断においても、難病や生活習慣病の早期発見に努め、本財団が一体となり、それら疾患の診療を展開し、広く一般住民の健康増進に貢献していく。また、胸部X線デジタル車を始め、更新した最新機器類を十分活用し、精度向上と効率的利用に努める。
4. 公益財団法人として、京都府内の難治性疾患研究に携わる研究者や臨床医、それを目指す研修医・大学院生を対象に人材育成や研究費等の助成する事業を積極的に遂行する。

上記を達成するために、次の事業を行う。

～ 中央診療所 ～

【 診 療 部 】

本財団診療部には、呼吸器系の難病あるいは全身性疾患としてのサルコイドーシス、膠原病を中心に各科領域の専門医が行う診断・治療と、一般外来（生活習慣病、感染症、総合診療）とがあり、これらは定款に掲げる目的通り、国民の健康保持、増進に寄与するための本財団の公益事業の柱である。

特定疾患であるサルコイドーシスや特発性、膠原病性間質性肺炎及び肺高血圧の診療では、京都府内ばかりではなく日本全国から本財団に診療やセカンドオピニオンのために訪れる患者もあり、呼吸器系難病診療の重要な診療施設となっている。本財団の医師・医療スタッフが一体となり、難病の診療に取り組み、その成果を学会発表、講演、技術指導に活かし、全国の同疾患で悩む多くの患者の診断・治療に貢献していく。

本財団が長年にわたり築いてきた臨床経験と実績に基づき、難病という病名の有無に拘らず病勢、臓器機能障害のある患者への適正な治療を行い、信頼を獲得できる外来診療作りを目指す。

令和2年度は、

1. 呼吸器系難病及びサルコイドーシス診療の充実を図り、膠原病、循環器系疾患、神経系疾患、筋・骨格系疾患などの難病の診療への取り組みを進める。特に、ステロイド薬、免疫抑制薬、抗線維化薬、肺高血圧の治療薬等による難病の治療、在宅酸素療法、栄養及びリハビリ指導については更なる充実を図る。これに関し、本財団の研究成果に関連する学会、大学等の研究機関を支援し、連携、協力をしていく。
2. 難病だけではなく、患者の生活の質（quality of life：QOL）に大きな影響を与える喘息や睡眠時無呼吸症候群、生活習慣病の糖尿病、高血圧、脂質異常症（高脂血症）、痛風、脂肪肝などの慢性疾患の診療や高齢者の診療についても充実させ、さらに、禁煙外来、心療内科的指導も充実を図る。「病気を持っていても、健康な気持ちで生活する」を支えるための指導を充実させて行く。
3. 上記の専門外来のみならず一般外来も充実させ、診療部受診者数は前年同様、年間20,000人を目標とする。
4. 健康診断後の精密検査を積極的に実施し、難病の早期発見はもとより、生活習慣に起因する疾患の早期発見にも取り組む。
5. 生活困窮者に対する診療費の減額、免除等の医療援助は、本年度も総受診者の10%以上、年間2,000人以上を目標とする。
6. 高齢者・中高年就業者・女性層などそれぞれに応じた総合診療的対応をして「病」の

みならず「人」を診る姿勢を強化する。

7. 薬剤の院外処方化を図るとともに、ジェネリック医薬品の活用を図る。

【 健 康 管 理 部 】

本財団健康管理部は、定款に掲げる精神に則り、本財団の公益事業の大きな一翼を担う難病の兆候の抽出に努め、早期発見、早期治療を目標として広く一般市民の健康診断を実施する。胸部疾患だけでなく、本年度も京都市や京都府下の自治体で行う学童・生徒の心臓健診、さらに一般健診で得た心電図を対象に詳細に検討し、循環器系疾患の早期発見、早期治療に努める。このように、健康診断から診療が必要な集団を見出し、難病対策事業を積極的に展開する。また、公益事業を支えるために、収益事業として広く一般住民の健康増進に貢献すべく、一般事業所・職域等の健康診断も併せて積極的に実施する。

令和 2 年度、健康管理部として以下の事業目標に従い、公益・収益事業とも、積極的に事業を展開する。

1. 公益事業として、市民健診や児童・生徒の心臓健診等を実施し、難病を初めとして、生活習慣病等の疾病の早期発見・早期治療に努める。特に、専門医が健診結果の判定に当たるなど、本財団が一体となって難病等の疾病の診療を展開する。
2. 収益事業拡充のため、一般事業所・職域等の健康診断の内容を充実させ、受診者の新規獲得に努め、来所健診の増加の方策を立案・実行する。近年は、健診の全項目実施が必要となってきており、本年度もその実施拡大に取り組む。本年度も、国の施策に則り、風疹の抗体検査及び風疹ワクチン接種やインフルエンザ予防接種に積極的に取り組む。これらの収益事業の拡充により、本財団が行う公益事業に還元し、寄与する。
3. 健康診断年間受診者数は、前年と同様に約 85,000 人を確保する。
4. 健康診断業務の効率化を図り、職員一人一人のスキルの向上と、健康診断業務の質的向上、およびサービス向上に努める。
5. 産業医として各事業所で、職場の安全衛生管理・衛生教育・労働者の健康障害やストレスチェック等の依頼に対応すると共に、事業主・衛生管理者に対する指導・助言を行う。
6. 本年度から、更新された健康診断管理システム (TAK system) が本稼働するので、健康管理部として万全な体制作りを行い、更なる効率化を図る。

～ 臨床研究センター ～

本財団臨床研究センターの事業は、全て本財団の公益事業の一環で、難病の早期発見・治療の調査・研究を行い、病気に対する理解と、健康増進意識の普及・拡大を図るため、令和2年度も以下の啓蒙活動を積極的に進める。

1. 難病に対し、以下のとおり啓蒙活動を継続する。
 - (1) 「第16回 治療をめぐる交流会：薬物治療・在宅酸素療法・リハビリテーション・栄養管理」 (令和2年4月18日開催予定)
(新型コロナウイルスの感染拡大により中止、以下に順延)
 - (2) 「第16回 サルコイドーシス・膠原病：患者・医療関係者交流会」
(令和2年10月に開催予定)

上記の集会を一般公開で開催し、当該疾患への理解を広め、患者のQOLの維持、向上に貢献するための情報発信と研究成果の報告を兼ねて行う。また、活動を通して大学との連携を図る。

2. 「健康と病気」に係る諸問題を取り上げ、以下の普及・啓蒙活動を進める。
 - (1) 「第19回 健康塾」 (令和2年3月19日に開催予定)
(新型コロナウイルスの感染拡大により中止、以下に順延)
「第19回 健康塾」 (令和2年9月に開催予定)
「第20回 健康塾」 (令和3年3月に開催予定)
上記集会を毎年2回、一般公開で開催し、社会保障の中での医療をめぐる問題についての啓蒙、超高齢社会における心身の健康管理の問題や公衆衛生・薬物療法・栄養指導などの情報を発信し、広く一般住民の健康増進に密着した活動を進める。
 - (2) 本年度より、読売新聞社と協賛する一般市民向講座を年2回の開催を予定
「市民健康講座」 (令和2年6月21日開催予定)
次回は未定
3. 難病に関する専門的な知識・情報を地元の医師や医療従事者に還元し、日常の医療活動に生かしてもらうための勉強会を企画、開催する。その他、地域保健センターとの共同での啓蒙活動及び患者会との共同啓蒙活動を積極的に行う。
4. 本財団で実施してきた臨床経験の蓄積、学術研究を、原著論文や書籍として発信する。また、健康診断での早期発見を含めた診断、治療等の研究成果の学会発表を行う。更に、講演等で機会あるごとに上記成果を発表、公開し、医療関係者だけでなく広く一般にも難病の情報を提供し、難病に対する理解を得る事業を進める。
5. 当医師、医療スタッフを始めとする職員の上記事業を進める上での、海外での学術

情報収集・技術習得を含め、本財団事業推進に必要と認められる研修会等に参加させ、支援する。

6. 本年度から開始する大きな取り組みとして、本財団の目的に沿う臨床や研究に従事する人材の育成や研究費の助成活動を積極的に推進し、難治性疾患の臨床研究・基礎研究の発展に寄与する。そのための諸規則等の制定や体制の整備を進め、この助成活動を円滑に立ち上げ、公益事業の柱としていく。

～ その他の事業達成に必要な事項 ～

先に掲げた本財団の令和 2 年度の事業を遂行、達成するため、また、本財団を円滑に運営するために以下の事項を進める。

1. 中央診療所の施設、設備全体に経年劣化が目立ってきている。このことから、本年度も、建物の内装、照明、空調等の設備の改修・整備など、テナントビルオーナーとも協議して随時進める。施設全体の保全を図り、受診者へのサービス向上並びに業務の効率化を進める。併せて、個人情報を含む文書類の増大とその保管厳格化に伴い、保管場所の確保が困難になりつつあることから、引き続き打開案を探っていく。
2. 本年度も、より高度な診療・検査体制を維持・発展するために、機器・設備の更新あるいは新設を計画的に行っていく。
3. 医療事務・健診事務の効率改善のため、健康管理（TAK）システムの更新・運用を進める。それに伴い、所内ネットワークについて、総合的かつ効率的なシステム構築に努める。
4. 本財団で働く人々の、より働きやすい環境整備を行う。いわゆる「働き方改革」を進め、職員の地位向上に努める。
5. 本財団の公益性を広く知らしめるため、令和 2 年度も年報作成を事業として継続する。
6. 助成活動を積極的に支援するため、定款・臨床研究センター規程運営規程、研究・奨学助成規定などの諸規程を定め、円滑に活動できるよう支援する。
6. 公益財団法人の 20 年会計基準に準拠した会計処理を行い、公益財団法人としての運営を遅滞無く進める。これらは事業報告並びに同決算報告を作成し、法人法第 22 条第 1 項の規定により期日までに行政庁（京都府）へ提出する。また、事業計画・事業予算についても同様とする。

以上

（文責：理事 高嶋 彰）